

法政大学大学院
入学試験問題用紙

試験科目	公共政策研究科 サステナビリティ学専攻 修士課程《一般》	2026年度 第1回	試験時間
小論文			60分

辞書参照 (可・否)

[注意] 解答は、別紙の解答用紙に記入すること。

以下の課題文を読んで、設問に答えなさい。

「疫病は、都市や建築を、何度も大きく転換させ、作り変えてきた。歴史を振り返ってみても、ペストによって、中世の密集した街と狭い路地は嫌われ、ルネサンスの整然とした都市と、幾何学が支配する大ぶりの建築が生まれた。では、今、コロナの後に、われわれは、どのような都市を作り、どのような建築を作らなければいけないのだろうか。(中略)

ひとつのテーマは、ハコからの脱却である。20世紀に、人々はハコに閉じ込められた。ハコの中で仕事をするほうが効率がいいとされて、超高層ビルに代表される大きなオフィスビルや大工場に、一定時間閉じ込められて、働かされた。そのハコに出勤し、帰宅するために、再び鉄のハコに閉じ込められ、密を強要された。大きなハコで働き、通勤する人が、この世紀にはエリートとされた。そして都市はハコに埋め尽くされ、ハコとハコの隙間も、鉄のハコの移動のための空間でしかなかった。この世紀は『自由の世紀』ともいわれたが、人々の暮らしを見る限り、ハコに閉じ込められた人々は、自由からは遠い存在に見えた。(中略)

公園は空調なくても、十分に気持ちがいいが、ハコは空調し続けなければならない。(中略)ハコの文明はすなわち空調の文明でもあった。それは同時に石油文明でもあった。(中略)より大きなハコが企業や都市のレベルを示すことだとみなされ、進んでいると考えられていた。そのような時に、コロナがやってきて、政府から、不要不急の時以外はハコに行くなといわれたわけである。(中略)

ハコからの脱却は、室内からの脱却ということでもある。僕はこれを、もう一回外を歩くことだと理解した。(中略)オフィスの近くに住んで、通勤の距離を縮めようというのが、コンパクトシティの考えである。都市計画の人たちは新しい言葉が好きで、スマートシティという言葉も最近よく聞かれるが、どちらも、ハコ自体を解体しようという意識は希薄なように見える。(中略)

新しいテクノロジーでエネルギー消費を削減するといっても、ハコを温存する限りは、ただハコが重装備になるだけで、ハコの値段が上がるだけで、都市の息苦しさは、いつまでたっても解消されない。新しい交通も結構であるが、歩くことは、単なる移動ではない。歩くこと自体が最も重要な時間となり、最も重要な時間を与えてくれるのである。」

出典)隈研吾「コロナ後の都市と建築」村上陽一郎編『コロナ後の世界を生きる—私たちの提言』

(岩波書店、2020年)

設問 「ポストコロナ」という言葉自体が死語になりつつある今日、筆者の批評を前提とした、ポストコロナ・21世紀における都市のあるべき姿について、「空間・環境」、「社会・生活・文化」、「経済」の3つの側面から具体的に論じなさい。なお、COVID-19以外にも、現代の都市文明を批判的にとらえ直すことが可能な他の視点を加えてもよい。また特定の都市を想定して論じてかまわない(ただし、その場合は従来の都市像を説明した上で、その変容について具体的に論じること)。